幼児の失敗場面に対する、保育士の言葉かけや関わり方に関する検討

○吉武久美子・浦川麻緒里（非会員）・松瀬美穂（非会員）
（長崎純心大学人文学部）

キーワード：幼児、失敗、関わり方

How the nursery school teachers speak to or deal with infants in the situation infants failed?

Kumiko YOSHITAKE, Maori URAKAWA and Miho MATSUSE
(Nagasaki Junshin Catholic University, Department of Humanities)

Keywords: infants, failure, dealing with

目 的

幼児は、排泄、食事、着脱などの基本的習慣を、失敗を繰り返しながら身に付けていくものである。しかし、例えば、幼児がおしっこを失敗すると、排泄をしつけることが自分の責任であると強く感じる母親は、幼児に対し強く叱ったり叩いたりすることが多い（浦川ら、2011）。また、初産等で子育てに不慣れな母親や、夫のサポートがなく孤立化した母親も同様に、強く叱る、叩くことが多かった（小川ら、2011）。

一方、保育現場でも、家庭と同様に幼児が失敗をする場面が多くある。しかし、それに対し経験豊富な保育士は日常的に多種多様な言葉かけや関わり方をしていると考えられる。そこで、本研究では、親への子育て支援を視野に入れながら、保育実習に行った経験のある大学生に対し、現場で幼児の失敗場面やうまくいかない場面について調査を行った。そして、幼児の失敗場面での幼児と保育者のやりとりを第三者として観察した結果をもとに、そこにある共通ルールなどについて考察を行う。

方 法

調査対象 N県・保育系大学生 84名（女性）。年齢 20.78歳。質問紙の構成 (1) 保育所実習で体験したことについて 1) 実習中、子どもが、基本的な生活習慣（食事・睡眠・排泄・着脱・清潔）で失敗、あるいは、うまくいかない場面として、どのような場面を思い出すか、子どもの年齢 2) その時の子どもの状況や様子 3) その場面での保育士の対応（全て自由記述）、(2) 実習経験、実習以外に乳幼児と関わった経験、(3) 幼児の問題行動を表す 19 個の状況をとりあげ、保育現場でどの程度見たことがあるか、自分だったらどの程度対応に困るか、イライラするか（村松、2003）(4) その他：年齢、性別等。

結果と考察

1. 基本的な生活習慣で幼児が失敗・うまくいかない場面
 - a) 排泄場面 22/70 件（31.4%）：排泄の失敗（11）、おねしょ（10）等
 - b) 食事場面 22/70 件（31.4%）：好き嫌い（6）、上手に食べられない（4）、飲みこめない・食べるのが遅い（4）、食べてくれない（4）等
 - c) 着脱 19/70 件（27.1%）：自分でやるが上手くいかない（8）、着替えの間違いに気づかない（3）、着替えようとししない（4）、最初から助けを求める（4）
 - d) 午睡 5/70 件（7.1%）：寝ない（2）等。

保育現場で幼児が失敗またはうまくいかない場面として多かったのは、主に排泄の失敗場面、食事場面であった。

2. 排泄場面の中で保育士の対応
 - a) 排泄の失敗（おしっこやうんちをもらす） 11/70 件
幼児の排泄の失敗に対する保育者の言葉かけ（3/11 件）では、失敗に対し、「気持ち悪かったね」というように、第三者からの言葉ではなく、失敗した幼児の視点からの幼児の思いを代弁するような言葉かけをしている。また「もう少しだった

ね」など、否定的な表現ではなく肯定的な表現で幼児に声かけを行っている。さらに、「次はできるように頑張ろうね」「次は（略）一緒にトイレにいこうね」など、現時点の失敗ではなく今後の方向へ注意を向けた肯定的な言葉かけ（2/11 件）が見られた。態度については、「責めずに」「泣いているのをなだめるよう」「大丈夫よ～」など、責めない態度で（4/70 件）、安心させるようなやさしい態度（3/70 件）が見られた。

また、「急いで着替えを持ってきて」等の迅速な対応（3/70 件）や、「周りの幼児に、からかわないように注意していた」等（1/70 件）、幼児の自尊心へ配慮し、周囲の他幼児からどうみられるかという他児からの視点を入れた対応が見られた。

b) 昼寝のおねしょの失敗 10/70 件
「気持ち悪いね」など幼児の気持ちに寄り添う声掛け（2/70 件）が見られた。さらに、責めない態度（3/70 件）や、迅速な対応（5/70 件）が見られた。さらに、皆がまだ寝ている場合は気づかれないよう静かにすばやく対応（1/70 件）など、周囲の幼児から気づかれないようという配慮の視点を入れた対応をしている。

一方で、「着替えは自分で」「自分の服を持ってくるように」させるなど、幼児が自分できる部分については保育士がするのではなく幼児に行動を促す声掛けも行っていた（3/70 件）。

さらに、お昼寝の前にちゃんとトイレに行ったかを聞いたり、おねしょ自体ではなく、おねしょを隠したことについては、その子に強く言い聞かせるという関わり方も見られた。

以上、その子ができなかったことは否定せず、一方で、できたはずなのにできなかったことについては、指摘したり適切な行動を促している。失敗ということで全部を否定的にとらえるのではなく、その行動の要素、要素を切り離して、一部 yes、一部 no という見方をしているところが、幼児にとって、保育者の言葉やかかわりを受け入れやすくしているのではないかと推察される。

3. 実習生が幼児との関わって困る場面

前述の検討以外に、保育実習経験のある大学生に、実習中、幼児と関わってどのような場面で困るかを聞いた。その結果、次の 4 場面が最も多くあげられた。a) 食事の時、食べずに遊んでいたり、立ち食いする、b) 静かにすべき場面で走り回って騒いだり、わけもなく大声で泣く、c) 泣く理由がわからず子どもがひたすら泣いている、d) いくらあやしてもなかなか泣きやまない。このような場面は実習生だけでなく、子育て中の親も対応に困ると考えられる。今後、経験豊富な保育者に、このような場面での対応や言葉かけを直接調査し、どのような共通の特徴があるのかを検討することを、今後の課題とする。

引用文献 浦川麻緒里・小川さやか・吉武久美子（2011）．幼児の排泄のしつけとして母親が叩く・強く叱るに至る背景についての検討（2）日本心理臨床学会第 30 回大会，p433.

* 本調査は、平成 25 年度一般社団法人全国保育士養成協議会九州ブロック協議会助成金による研究である。